

# 政治学概論Ⅱ《2024》

## 国際政治学（3）：国際政治を見る視点（1）

荻谷 千尋

4, Feb, 2025

### I. 授業の感想

#### 1. ジェンダー

- 岩田さん；丹後さん；小松原さん；西田さん
- Cf. 「「女の人生は、卵子中心に動くのか？」 国が進めるプレコンセプションケア① 秋田県が高校生に配った冊子」（生活ニュースコモンズ）

#### 2. 憲法

- 大久保さん

### Ⅱ. 国際政治を見る視点

#### 1. 国際社会の諸問題の特徴

1. 複雑かつ多様
  2. 数多くの非公開情報<sup>1 2</sup>
  3. 深刻な利害対立
  4. 対外関係についての国内向けの説明を要する
- 国民に弱腰と見られないための強気の外交を強いられる（屈辱外交；弱腰外交<sup>3 4 5</sup>）
  - ➡思考の単純化を要請

#### 2. 思考の単純化

##### (1) 陰謀論

ある出来事について、一般に理解されている事実や背景とは別に、何らかの謀略が存在することを主張する意見（『大辞林』）

- 例：アメリカ同時多発テロはアメリカの自作自演
- 例：被害はウクライナの自作自演
- 誰がもっとも利益を得るのかを機軸とする推論
  - 一見、合理的な思考に見える
  - 先入観を投影しやすい
  - 常識を疑う、という人ほどはまりやすい（「マスゴミゲー」「ネットで真実がわかった」）

##### (2) ステレオタイプ

##### 1) リップマン

- ジャーナリスト。第一次世界大戦中、ウィルソン大統領の元、和平に対する広報活動に携わる<sup>6</sup>
- 第一次世界大戦中、各国のプロパガンダによって人びとがステレオタイプ（画一的な意見）を受容したことを問題視し、その解明を目指す（『世論』）

- 複雑な事象を理解するために、人（の認知行動）は既存の、または（一見、新規に見える）認知枠組みを簡単に受け入れる
  - 情報ソースを確認し、複数の情報ソースを比較検討し、何が事実なのか、何がわかっていて、何がわかっていないのかを分析することは大きなコスト（リテラシー教育は重要だが、その難しさを理解する必要あり）

## 2) 『世論』 抜粋

どんな人でも、自分の経験したことのない出来事については、自分の思い描いているそのイメージが喚起する感情しかもつことはできない。

我々はたいていの場合、見てから定義しないで、定義してから見る。

われわれがその鋳型（ステレオタイプ）にむりやり身体を合わせるときには、気持ちをそそられるものをたくさん捨てなければならなかった。しかし、一度その中にしっかりとハマってしまえば、履き慣れた靴のようにわれわれにぴったりとくるのだ。

このような事情には経済性という問題がからんでいる。あらゆる物事を類型や一般性としてでなく、新鮮な目で細部まで見ようとすればひじょうに骨が折れる。まして諸事に忙殺されていれば実際問題として論外である。

- ステレオタイプを政治的に利活用する政治家
  - ナチスによるユダヤ人への偏見の利用<sup>7</sup>
  - プーチン、ウクライナ政府をナチスに、ロシアをナチスを解放したソ連軍になぞらえる
  - 理想主義者＝お花畑

美しいポリコレ（政治的な正しさ）みたいなものでストーリーをつくって、それを疑問視する人をひたすらたたくお花畑正義感の人たち」<sup>8</sup>

## (3) 研究者のアプローチ

### 1. 推論

- 代表的研究：アリソン『決定の本質』（1971年）
  - キューバ危機（1962年）におけるキューバの行動様式を推論
  - なぜソ連はキューバに核ミサイル基地を建設したのか？
  - 西側の政府、研究者ともに十分なコミュニケーション、資料がないなかで、一定の説明を求められていた

#### 1. 合理的アクターモデル

- アクターが合理的な意図をもって行動していると仮定
- 少なくとも自国の国益を正確に把握し、その拡大をめざしている
- 問題点：確証バイアスの可能性を排除できない
- 内部情報にアクセスできない場合、やむを得ず用いられる
  - 現在のロシア分析

#### 2. 組織行動モデル

- アクター（官僚）が合理性を無視して、組織の前例に従って行動していると仮定
- 核ミサイル基地を置くことに、特別の意図、メッセージはない

#### 3. 政府内政治モデル

- アクターが合理性を無視して、自国の政治家が権力闘争をしていると仮定
- 核ミサイル基地を置くことは、対米関係や世界戦略とは無関係

### 2. 歴史的アプローチ（古典的アプローチ）

- 国際政治学の京都学派：高坂；中西
- 国際政治学のイングランド学派

### 3. 計量的アプローチ（科学的アプローチ）

- アメリカの国際政治学
  - Cf. 多湖淳 (2002); 板橋拓己 (2015)

#### Note

歴史的アプローチと計量的アプローチについては、次回の講義で説明します

### 3. 対象

#### 1. 国家間関係

- 政治的・経済的・軍事的問題
- 例：ウクライナ・ロシア戦争
  - 伝統的に、国際政治学が関心を寄せてきた領域
  - 国益に直結しており、主たるアクターを想定しやすい（実際に主権を行使する政府）

#### 2. 複数国家にまたがる非政治的・経済的諸問題

- 例：環境問題；難民問題；公衆衛生問題
- 問題と国益の関係が不明瞭、対立する複数の解釈がありえる（問題が放置されがち）
- 主たるアクターが不明なことが多い
  - 例：第2次トランプ政権のパリ協定離脱、WHO脱退
    - 社会運動として始まり、NGOが声を上げる
    - 例：グレタ・トゥンベリ
- ➡協議の方法を含め、解決方法についてのノウハウが蓄積されていない

#### 3. 他国の国内問題

- 例：アメリカ大統領選挙；中国の経済政策；コンゴ紛争（ゴマ陥落）
- ➡内政問題であっても、他国に波及するがゆえに、関心を持たざるを得ない
- ➡内政問題であっても、国際社会の規範を大きく既存するがゆえに、放置できない
- 例：ウイグル自治区問題

## III. 国際社会の3つの位相とその重層性

### 1. 3つの分類

現在の国際社会は、主権国家体制、国際共同体、世界市民主義の3つの異なる位相、構造から成る（中西寛 (2003)）

#### (1) 主権国家体制

- 基本単位：国家
- ウェストファリア・システム
  1. 主権国家は国内社会において至高の存在
  2. 主権国家は国家間関係において相互に対等
    - 主権国家の上位にいかなる権威も存在しない
  3. 個人の自由、福祉は、自ら同意する主権国家を持つことで実現
- 要請される行動：
  - 各国の国益の拡大
  - 勢力均衡
  - 内政不干渉

- 問題：

- 大国の利益が優先され、大国の利益を棄損しない国際問題は放置される（主権国家体制は、擬似大国支配）
  - 例：核兵器不拡散体制
- 内政不干渉を実質的に担保するのは大国の力
  - 例：「不法移民乗せた米軍機拒んだコロンビア、一転受け入れ」（『読売新聞』2025年1月27日）
  - 「政府、国連女性差別撤廃委への抛出停止へ 皇室典範の改正勧告に抗議」（『朝日新聞』2025年1月29日）
  - 「印 総選挙前に野党連合指導者逮捕めぐる米発言 内政干渉と反発」（NHK NEWS）

## (2) 国際共同体

- 永続的な多国間ネットワーク

- 第2次世界大戦後の国際共同体の中心的な担い手：アメリカ合衆国
  - パックス・アメリカーナ：「自由で民主的な世界」の構築をリード
  - アメリカの国益と世界の利益の一致を目指す（少なくともそのようなロジックの理念を標榜）
    - 国際連合；WHO；GATT（WTO）；国際刑事裁判所
  - 第2次トランプ政権のアメリカー国主義への退行
  - 「ああ」「尊敬される国」<sup>9 10</sup>
  - パックス・アメリカーナの終焉か？分水嶺（クリティカル・ジャンクチャー）としての2026年下院選挙

- 基本単位：主権国家と事務組織

- ただし、国際機構；社会集団；個人も一定の範囲で国際政治の主体に
- 価値、目的、利益の**共有**

- 要請される行動：国家間の協力

## (3) 世界市民主義

- 人間の普遍性を掲げる
- 基本単位：個人
- 国家は擬制；平和の達成に国家は不要（世界国家の設立）
- 要請される行動：国家の脱却と世界統一

## 2. 国際政治のトリレンマ

- 国際社会

- この3つの位相ならびに規範の混合物

国際政治においてとられるべき行動について、倫理的に安易な選択は存在しない。  
国際政治の大半は、自己の国益を守ることと世界的な公共利益のために行動するという二つの要請の間で、いかに妥協を図るかという点につきるからである。責任ある行動をとる国家は、自国も含めた国家が、国益を離れて行動できるとは考えていない。しかしまた、責任ある国家は、自国の国益の擁護だけを考えて行動できないというのも事実なのである。こうして一定の影響力を持つ国家の行動は、しばしば偽善的と映ることになる。しかしあえて言えば、それが国際政治を生きるということなのである（中西 2003: 26-27）

## IV. 理想主義と現実主義

### 1. 理想主義 vs 現実主義

#### (1) 初期近代の理想主義

- 15-17世紀：ヨーロッパの統一による平和を目指す（カトリック信仰；反トルコ・反キリスト）
- 17世紀：コスモポリタニズム。サン・ピエールら、平和の維持を目的とする国際機構構想するも、**力（主に軍事力）の問題を度外視**

#### (2) 近代の理想主義

- 永遠平和論の実現困難さを前提に、国際平和を構想
- ルソー：永遠平和が実現しないのは、君主の独善性、悪意によるのではなく、国益と国際社会の利益の性格の相違のためと分析。**国家が利己的であることは否定できない現実と受け入れる**。ただし、ルソーは永遠平和のプランを提起できなかった
- カント：『永遠平和のために』（1795年）。国家連合、諸国家の統合（いわゆる世界政府論）による平和を放棄。完全に独立した国家の法の支配による平和を主張（19世紀以降の国際社会論のベースとなる）

#### Note

カントについては「国際法と国際機構」の回で再度、紹介します。

#### (3) 1930年代の対立軸

- 理想主義：国際機構（国際連盟）や自由貿易主義は平和をもたらす
  - ➡ 国際連盟の機能不全、ナチスの台頭を受けて、見直しを迫られる
- 2人の現実主義者：モーゲンソーとE. H. カー
  - それぞれ国際法学者、外交官を出自とし、国際政治学の成立に貢献
- モーゲンソー：
  - 主著『国際政治』（1948年）
    - 国際社会は本質的に無秩序。主権国家外の領域をより良くしようというインセンティブを欠く
    - 「現行の勢力配分を維持しようとする政策（policy of status quo）と、勢力配分を変更して有利な地位を得ようとする政策（imperialism）の対立」（西平等（2016）, p.192）
    - 勢力均衡論の有効性と限界を分析
- E. H. カー
  - 主著『危機の二十年：1919-1939』（1939年）
    - ユートピアニズム：自由意思（現実の諸条件を過小評価し、未来を自由に構想）
    - リアリズム：決定論（現実の原因と結果の分析に注視するあまり、未来の可変可能性を過小評価。現実追従主義に陥る）
    - 権力を分解：軍事力；経済力；意見を支配する力<sup>11</sup>
    - 国際的動議が利益調整機能に果たす役割を分析
    - 権力政治勢力均衡について論ぜず

#### (4) 1960年代日本の対立軸

- 単独講和か全面講和か

- 日米安保か非武装中立か
  - 坂本義和と高坂正堯の論争（初瀬龍平（2017））
  - とともにモーゲンソーに学ぶ
  - 坂本：日米安保条約を理由に、ソ連が日本を敵国と見做す可能性を指摘。原子爆弾を前に通常兵器は意味を失っているとみる。中立こそ日本がとるべき選択肢<sup>12</sup>
  - 高坂：中立政策は「中立」を意味しない。中立政策に転換することで力の均衡が崩れる。原子爆弾は簡単に使うことができないがゆえに、通常兵器がもつ意味は依然として重要<sup>13</sup>

## 2. 古典的外交官の現実主義

- マキアヴェッリ『君主論』（1532年）
  - フィレンツェの外交官（メディチ家支配から共和国体制への移行期）
  - イタリア半島は都市国家同士が戦争状態にあり、大国フランスの侵略を招く

いかに生きているのかということと、いかに生きるべきであるかということとは、はなはだかけ離れている。それゆえ、いかに生きているかを見過ごし、いかに生きるべきかを見ている者は、自らを保持することよりも、むしろ破滅することを思い知らされるであろう（マキアヴェッリニッコロ（池田廉訳）（1995）, pp.90-91）

われわれの経験は、信義を守ることなど気にしなかった君主のほうが、偉大な事業を為しとげていることを教えてくれる。それどころか、人々の頭脳をあやつることを熟知していた君主のほうが、人間を信じた君主よりも、結果から見れば優れた事業を成功させている（マキアヴェッリニッコロ（池田廉訳）（1995）, p.102）
- カリエール『外交談判法』（1716年）<sup>14</sup>
  - ルイ14世に仕えた外交官

有能な交渉家は、彼が受けとる情報を、すべてそのまま軽々に信じはしない。その前に、問題の情報をめぐるすべての事情や、情報を提供した人たちの利害関係と情熱や、情報の対象になっている企みごとを、彼らがどうやって発見できたのか、その情報は彼が同じ事柄の様子について別の筋から知っていることと一致するか、その情報を本当らしく思わせるような動きや準備が何かされているか、を検討する。そのほかにも、有能で洞察力のある人ならば、的確な結論を引き出す手がかりにできるような徴候が数多くある。ただし、そうした徴候についての法則を作っても、こうした場合に必要な理解力を生来そなえていない人たちのためならば、耳の聞こえない人間に話しをするのと同じで、無駄なことである（カリエール（坂野正高訳）（1978））

## 3. 高坂正堯の現実主義

### (1) 高坂正堯（1934-1996）略歴

- カント哲学者を父（高坂正顕）にもつ。京都大学で国際政治学を教える<sup>15</sup>
  - 17世紀から19世紀までのヨーロッパ外交史の知見から、独自の国際政治哲学を構想
    - カリエール、カニングら現実主義的な外交官と、ルソー、カントら理想主義の双方に学ぶ
- 現実の日本外交に積極的に関与
  - 佐藤政権から中曽根政権までの日本外交の助言者を務める

### (2) 現実主義と現実追従主義を区別

- 現実主義：現実と理想の相違に自覚的でありながら、現実を理想に近づけるための狭い道を探り続ける
  - 現実追従主義：現実をあるがままに受け入れ、それを正当化することが正しいと主張。現実と理想を二元論的に解釈し、理想を実現可能性のない夢想と見做す



### (3) 日本外交分析

- 日米安保条約を中心とする日本外交を肯定
  - 日本をフェニキア、ヴェネツィアに並ぶ「海洋国家」と位置づけ、自由貿易の享受者と見做す。吉田外交こそが戦後日本外交の機軸であるという見解を決定づけた<sup>16</sup>
  - 当時の日本の学会は永世中立を肯定する雰囲気が強かった
- 日本人は、国際環境を、まるで天気のような、与件であるかのように考えていると批判（外交の能動性を主張）
  - 「海洋国家」に有利な国際秩序を作るために日本外交は何をすべきか

### リーディングアサインメント

- 大石さん；加藤さん；喜多川さん；野田さん；原田さん；三島さん

### 抜粋

#### (1) 平和のかたちをめぐる闘争

現在の国際政治は権力政治であることをやめたのではない。いかなる平和を求めるかという形で、権力闘争がおこなわれているのである（高坂正堯（1966）, p.12）

#### (2) 軍事力

軍備はただ強力であればよいのではなく、相互の軍備が使われる可能性を最小にすることができるとはならないし、武力を行使しなければならないときには、その武力行使が相手側の意思に影響を与えるために必要な最小限のものに抑制されなくてはならない。そのため、対立する国のあいだにコミュニケーションが成立していなくてはならないことになる（高坂正堯（1966）, p.67）

#### (3) 混乱した国際政治状況の原因

混乱した国際政治の状況は、測り知れぬほど大きな困難を各国家に投げかける。なぜなら、混乱した国際政治の状況は、邪悪な国家が存在するからおこるのではない。またそれは人びとの道徳的墮落によって説明されるものでもない。混乱した国際政治の状況とは、各国の行動を規律する準則が弱まり、他の国がいかなる行動様式をとるかを理解できないか、あるいは信用できない状況なのである。安定した状況には、そのような行動準則が存在する。国際法はそのもっとも代表的なものであった（高坂正堯（1966）, p.192）

#### (4) 現実主義の平和構想

可能であるのはこの混乱状態を間接に直すことだけである。もちろん、その間接的な方法は一つではなくて、いくつもある。それはこの書物の各所においてすでに論じてきた。しかしそのもっとも代表的な方法は、いくつかの正義と力が対立する状況を凍結することである。それは対立の原因そのものを除去しようとすることを断念することからはじまる。たしかに、現在の世界における対立は、いくつかの正義が対立し、国家の行動を規律する準則がないことだけであるからである。現在の国家間の対立を、あたかも単純な力の闘争であるかのように考え、そのようなものと対処していく現実主義は、このような国際政治の本質に根ざす困難の認識に根ざしている。困難の認識から、異なった正義の対立という事態の本質をあえて棚上げにして、それから現れる力の闘争という現象だけに対策をしぼろうとする。それは権力闘争に対処することだけに足しているものではないが、権力闘争を離れて直接に対立を解決しようとするのが不可能でなく、かえって望ましくないことを認識しているがゆえに、その立場を選ぶのである。国際政治においては、対立の真の原因を求め、除去しようとしても、それははてしない議論を生むだけで、肝心の対立を解決することにはならないのである。それよりは対立の現象を力として、あえてきわめて皮相的に捉えて、それに対処していくほうが賢明なのである（高坂正堯（1966）, pp.197-198）

### V. 参考文献

- カリエール（坂野正高訳）（1978）『外交談判法』、岩波書店。  
マキアヴェッリニッコロ（池田廉訳）（1995）『君主論』、中央公論社。  
中西寛（2003）『国際政治とは何か：地球社会における人間と秩序』、中央公論新社。  
初瀬龍平（2017）『国際関係論の生成と展開：日本の先達との対話』 初瀬龍平. et al., eds., ナカニシヤ出版。

坂本義和 (1959) 「中立日本の防衛構想」. 『世界』.

多湖淳 (2002) 「アメリカの軍事行動における「手段選択」：1946～2000年データセットの提示と解釈」. 『アメリカ太平洋研究』, Vol.2, pp.203–226. Available at: <https://cir.nii.ac.jp/crid/1390290699582330752>.

板橋拓己 (2015) 「「アメリカの社会科学」とどう向き合うか(1)：ドイツの国際関係論(IB)の歴史と現状」. 『成蹊法学』, No.83, pp.118–92. Available at: <http://ci.nii.ac.jp/naid/120005695239/>.

牧原出 (2014) 戦前と戦後：政治と官僚制の視座. In 福永文夫, and 河野康子., eds. 『戦前と戦後：政治と官僚制の視座』 『戦後とは何か（上）：政治学と歴史学の対話』 丸善出版.

西平等 (2016) 「ポスト・ウェストファリア」の理論家としてのモーゲンソー. In 山下範久, 安高啓朗, and 芝崎厚士, eds. 『「ポスト・ウェストファリア」の理論家としてのモーゲンソー』 『ウェストファリア史観を脱構築する：歴史記述としての国際関係論』 ナカニシヤ出版.

高坂正堯 (1966) 『国際政治：恐怖と希望』, 中央公論社.

高坂正堯 (1963) 「現実主義者の平和論」. 『中央公論』, Vol.78, No.1, pp.38–49. Available at: <https://ci.nii.ac.jp/naid/40002390872/>.

- 
1. 日本の外交文書は「作成又は取得から30年以上が経過した」ものが公開される（「外交記録公開に関する規則」、外交記録公開）↪
  2. 「ウルグアイ・ラウンド交渉、コメ輸入の全面受け入れで宮沢首相「選挙に負け続けてしまう」…交渉巡る外交文書公開」（『読売新聞』2024年12月26日）↪
  3. 山上信吾・山岡鉄秀「日本はなぜ中国にナメられるのか…?：「弱腰」すぎる日本の外務省の「驚くべき態度」（現代ビジネス）↪
  4. 「岸田元首相と石破首相は、中国共産党のご意向に沿った政策を打ち出していますか?」（YAHOO!JAPAN知恵袋）↪
  5. 「トランプの御機嫌取りで今度は余ったトウモロコシを大量に買わされた。」（YAHOO!JAPAN知恵袋）↪
  6. 「各民族の自治権は確立しても、ハプスブルク帝国を解体してはならない」とウィルソン大統領に進言↪
  7. 『ゲッベルス ヒトラーをプロデュースした男』（公式サイト）↪
  8. 「自民議員「お花畑」発言の背景は 「もっと咲かせよう」逆張りの声も」（『朝日新聞』2022年8月27日）↪
  9. 「私が最も誇るレガシー（政治的遺産）は、平和の構築者と団結させる者になるだろう。平和を構築し、団結させる者になりたい。私の就任前日であるきのうから、中東で人質が家族の元に戻り始めているのは喜ばしい。米国は、地球上で最も偉大で強力、最も尊敬される国家としての正当な地位を取り戻し、全世界の畏怖（いふ）と称賛を呼び起こすだろう。」（『朝日新聞』2025年1月21日）↪
  10. 「米国は再び尊敬され、称賛されるだろう。あらゆる宗教、信仰、善意の人々からも。われわれは繁栄する。誇りを持つようになる。強くなり、かつてないほどの勝利を手にする。征服されず、脅かされることもない。くじけることなく、失敗することもない。この日から、米国は自由で主権を持つ独立国家となる。」（『朝日新聞』2025年1月21日）↪
  11. ハード・パワーとソフト・パワー（ジョセフ・ナイ）↪
  12. 「日米安保体制を擁護する人々には、最後にはアメリカと共に滅ぶことを覚悟しておかなければならない」（坂本義和 (1959)）↪
  13. 「われわれは、すでに権力政治のなかに組み入れられており、権力政治的な力の均衡の平和の一つの要素となっている。日本がそこから突然退くことは、力の均衡にもとづく平和を危機にさらすというギャンブルでしかない」（高坂正堯 (1963)）↪
  14. De la manière de négocier avec les souverains（直訳「君主との交渉の仕方について」）↪
  15. 中西寛 (2019) 「恩師を語る：潜れども潜れども叡智は深く」（『紅萌』）↪
  16. 「宮澤（喜一）は正面から、政府が何もしないことによって高度経済成長が成立したという言い方をしてきました。山手線の運転手としての政府像を言うわけです。しかし、その背後には政治的記憶を保存し、次に継続させようという意図と、いかにも自負があるのではないのでしょうか？ 吉田内閣の良質な批評者であった宮澤を体現する形で高坂さんの『宰相吉田茂』という本があるように思われます」（牧原出 (2014), p.151）。↪